CLOSE-UP
クローズアップ

全日本大学自転車競技大会男子
個人ロードレース・学連の部で優勝

自転車競技部 **尾形尚彦**選手（文４）

自転車競技部の尾形尚彦選手（文４）が、全日本大学対抗選手権自転車競技大会（インカレ）の代替大会として、昨年10月に開催された「2020全日本大学自転車競技大会」男子個人ロードレース・学連の部で優勝を飾った。学生競技の頂点に立ったことが自身を後押しし、卒業後は自らの可能性をさらに追求しようと、プロの競技者としての一歩を踏み出す。

将来の目標は五輪の舞台だ。「自身の走りを通して、見る人に勇気や感動を与えられる選手になりたい」と夢を膨らませる。

「将来はオリンピック選手を目指す」

「正々堂々と戦えた」

男子個人ロードレース・学連の部は10月17日、群馬サイクルスポーツセンター（群馬県みなかみ町）のサーキット（1周6キロ）を17周する計102キロで争われた。当日は雨が降り、気温10度に届かないという寒さ。低体温症も予想され、実力のある選手でも何が起きるか分からないという厳しいコンディションだった。

中盤から終盤にかけて、有力選手がどんどん脱落していく。残り3周という手前では、尾形選手を含む集団と先頭との間に1分ほどの差があった。「追いつくのは無理かもしれない」と思ったが、「不完全燃焼で学生の競技生活を締めくくるのは嫌だ」と気持ちを奮い立たせた。

一か八かの懸けで追走態勢に入る。すると、ペダルをこぐ足が思うように回った。みるみるうちに差は縮まり、先頭に追い付いた。体力を温存できていたことも奏功した。ゴール後も「まだまだペダルを踏める感覚があった」という。

コースの大半を、“風よけ”として不利な条件となる先頭に立ち、集団を引っ張った。「最上級生の意地を見せて勝ちたかった。正々堂々と戦えた」と振り返り、「日々のトレーニングのほうが、よほど苦しかった。追走劇はそのおかげです」と胸を張る。

前年の挫折を糧に飛躍

尾形選手にとって、2020年が自らの可能性を確信した年ならば、苦しみ、悩んでも歯車がかみ合わな

尾形尚彦選手

おがた・たかひこ。宮城・東北高卒、文学部4年。168センチ、58キロ。専門種目はロードレース。父親の昌彦さんも中大自転車競技部に所属し、主将を務めた。コロナ禍の2020年は大会日程がなかなか決まらず、競技に対するモチベーションを保つのが難しかったという。多摩キャンパスのCスクエアの食堂をよく利用し、「心優しい従業員の方ばかりだった」と感謝。魅力あふれる施設がたくさんあり、忙しい部活動の中でキャンパスに行くのが楽しみだったという。

い、好成績を残せなかった前年の2019年は「努力しても報われない」という大きな挫折を味わった年だった。

春先は快調だったが、けがもあり、2カ月近く競技を離れた時期があった。それでも真摯にトレーニングを積み、夏のインカレ直前には「過去最高の仕上がり」と感じるまで手ごたえをつかめたはずだったが、男子個人ロードレースの順位は目標の優勝に遠く及ばない36位に終わってしまう。

2019年は自転車競技部が1953年の創部以来初のインカレの男子総合優勝を成し遂げた年で、仲間の歓喜の輪に加わっても、「僕はチームに貢献できていない」と心から喜べなかった。

「（4年生の）まだ1年チャンスがある。何としても雪辱を果たしたい」。2020年大会のレースには、その決意で臨み、見事に頂点に立ったのだ。

名門「シマノレーシング」へ

2021年4月からは、自転車部品や釣具の製造販売などを手掛けるメーカー、シマノ（堺市）が運営する自転車ロードレースチーム「シマノレーシング」所属となる。1973年に発足し、日本の自転車競技界を引っ張ってきた名門チームである。

「プロとして競技に取り組むには世界を目指さなければいけない」。この固い意志を貫くためと、シマノレーシングの活動方針や選手へのサポート体制から、思い切って競技に専念できる環境だと確信したという。

「努力しても報われなかった」という2019年の苦い思いから、卒業を機に競技生活を終えることも考えた。ただ、気持ちにモヤモヤを抱えたままの就職活動は思うように進まなかった。優勝した2020年大会は、そんな思いに終止符を打ち、自身の可能性に気づかせてくれた。

「今しかできないことは何か」を見つめ直した結果が、プロの道へと続いていた。

「何かを達成するまでの自分と真剣に向き合う」「自分磨きに徹する」

尾形選手は「辛くて逃げたくなったときでも、自分と真剣に向き合うことができれば、成功へ近づく。結果よりもそれを達成するまで、どのような自分であるか。それこそが人として大きく成長させてくれると、4年間で学んだ」と中大での学生生活を振り返った。

ほかの卒業生へのメッセージを頼むと、「まだまだ人生これから。自分磨きに徹していきたい。夢や目標に向かって努力する過程で、時には報われないと感じる努力も、どこかで必ず力になってくれます」とエールを送った。

自転車競技の魅力とは…

尾形選手に自転車競技の魅力を尋ねると、「目の前をものすごいスピードで集団が駆け抜ける迫力です。選手同士の駆け引きも目まぐるしく変化し、見る人を楽しませてくれます」と説明してくれた。

「ゴール間際に集団で一斉に優勝を争うより、力の差を見せて後続を突き放すレースで勝利した方が喜びは大きい」。尾形選手はそんな走りを常に意識しているという。

体力を奪う空気抵抗を小さくするため、他の選手の後ろにぴたりとつくことが体力温存につながる。このため、平坦で50キロ以上、下り坂では90キロ超というスピードを出しながら密集してレースが進む。尾形選手も今も恐怖感に襲われることがある。転倒したことがトラウマとなり、競技生活を終えた人も少なくないという。

「最後の最後に恩返し、うれしい」
添田前監督の言葉で中大進学を志望

ゴール後、真っ先に優勝を報告した相手は、レース会場で見守っていた自転車競技部の添田広福（ひろよし）前監督だった。「一緒にインカレ優勝に向けて頑張らないか」と高校時代に声をかけられ、中大進学を志望した。大学でも2年まで直接指導を受けた。尾形選手は「大学での競技生活の最後の最後で、添田前監督に恩返しできたことが本当にうれしい」と話している。

■2020全日本大学自転車競技大会

男子個人ロードレース・学連の部成績
（10月17日、群馬県みなかみ町、群馬CSC）

順位	名前	所属	タイム（時間：分：秒）
1	尾形　尚彦	中央大	2:33:39
2	天野　壮悠	同志社大	2:33:44
3	兒島　直樹	日本大	2:33:46
10	中村　龍吉	中央大	2:34:54
17	五十嵐洸太	中央大	2:35:09

（日本学生自転車競技連盟のサイトより抜粋）

「コロナ禍の学生」テーマに取材

FLP松田美佐ゼミの学生2人が報告

ジャーナリズムについて学んでいるFLP松田美佐ゼミに在籍する鈴木雄也さん（経済４）、水谷遥香さん（法４）の２人が、コロナ禍でも前向きに物事と向き合っている中大生らの姿と、2020年春以降の中央大学のオンライン授業導入への環境整備について取材しました。

新型コロナウイルスの感染拡大がなかなか収束しない状況にあり、松田文学部教授は「十分な取材が難しかった面がありますが、ゼミ生それぞれが関心を持つテーマで取材対象を選びました」と話しています。２人の報告です。

コロナ禍でも前向きに物事に向き合う学生たち

鈴木雄也
（経済４）

小中高校で授業が再開される一方、大学の多くはオンライン授業が続き、大学生はパソコンと向き合う日々を送っている。通学できない学生たちの悲痛な思いがSNSにあふれ、私たち大学生は他の世代に比べ、多くのものを奪われてしまったと感じている。そうした困難な状況の中でも、「誰かのために」動き続けていた学生たちの姿を紹介したい。

中央大学が2019年4月に開設した国際経営学部は、2020年4月に２期生となる新入生を迎えた。この１年生の不安を少しでも和らげたいという思いで結成されたのが同学部の「Welcome 2nd」だ。1期生の２年生の有志メンバー 7人が中心となり、同年4月以降の4回にわたり、1年生を対象にオンライン相談会を開いてきた。

「誰かのために」自発的に主体性をもって動く

相談会では、SNSなどで送られてきた1つひとつの質問に丁寧に回答する。1年生が気軽に参加できるように、ビデオカメラとマイクをオフに設定してもらい、まるでラジオ番組のようにユーモアを交えながら語りかけるなどの工夫も凝らした。参加した1年生からは「大学には通えていないが、（大学やキャンパスの）雰囲気を味わえて楽しかった」といった反応があり、メンバーたちはやりがいを感じたという。

「1年生には何事にも積極的に挑戦してほしい」と語るのは、有志メンバーの1人、滝田哲之さんだ。活動を通して、困難な時でもリーダーシップを発揮することの大切さを学んだ。さらに「"経営"と名の付く学部に在籍しているからこそ、リーダーに足る人間になりたい」と力強く語ってくれた。

新設学部だからこそ、学部の伝統を現在の学生たちが創造していくことができる。学生たちが何事にも果敢に挑戦し、困難な時でも常に進化し続ける学部として発展してほしいと、私は願っている。

自分が楽しむことが誰かの活力に

「苦しい時こそ、その時をいかに楽しむかが大切」。そう語るのは、動画投稿アプリ「TikTok」のアカウント『早大生 祖父日記』を開設している早稲田大学３年の野中陽太さんだ。

コロナ禍以降、車いす生活を送る86歳の祖父と一緒にダンスを踊るなどの動画を投稿し、ほほえましい家族間の交流の様子や簡単に真似のできる踊りが、閲覧する人を楽しませている。コロナ禍でも自分も他人も楽しむために何ができるかを考え、アカウントを開設したという。

根っからの“おじいちゃん子”の野中さん。撮影回数を重ねるうちに、祖父の表情が明るくなっていったのがとてもうれしかったそうだ。また、動画を見たある女性からのメッセージを読んだときに、アカウントを開設してよかったと強く感じたという。

女性の息子には障害があり、運動会で自分だけがダンスを上手に踊れず、ダンス嫌いになっていた。ところが、野中さんと祖父が一緒に踊る動画を見て、「息子が再び楽しそうに踊り始めました」と感謝の言葉を寄せてくれた。体が不自由でも楽しそうに踊る祖父の姿が、息子の自信を取り戻したのである。自分も他人も楽しむという活動が、誰かを勇気づけることに結びついたのだ。

ワクワクから得た大きな“気づき”

誰かを勇気づける過程で、大きな“気づき”を得た学生もいる。

「歌を通して今の思いを未来へつなげ、未来を明るくしたい」という思いから、早大の新たな応援歌「そして紺碧の空へ」の制作に携わった早大4年の遠藤伶さん。「SHARP# 紺碧のうたプロジェクト」の代表を務め、SNSで募った等身大の母校への思いを、作詞・作曲を担当した早大OBの音楽家、杉山勝彦さんに託した。杉山さんは、嵐や乃木坂46にも楽曲を提供し、日本レコード大賞作曲賞も受賞している。ほかにも、さまざまな大学関係者の協力を得て、ミュージックビデオや合唱動画、ダンス動画を制作した。

制作に大勢の人が関わる過程で、責任の大きさを実感し、遠藤さんの心に恐怖心のような感情も芽生えた。しかし、怖さに打ち勝ち、形あるものを結果として示すため奮起した。YouTubeで紹介した動画には好意的なコメントが寄せられ、喜びがこみ上げたという。

「皆で新しいものを作るのが、何よりも好きだと気づけた」と活動を振り返り、何らかの一歩を踏み出そうとしている学生たちに向けて、「自分の心が動く瞬間に敏感になり、そのワクワク感を周囲の人にありのままに伝えてほしい」とメッセージを寄せてくれた。

実は野中さんと私は中学高校の同窓生。遠藤さんを含めた2人の活動をSNSやテレビで知って興味を持ち、話を聞こうと取材した。

コロナ禍にあっても、誰かのために動き、自らも楽しさや喜びを得ていた学生たちを紹介したが、彼らに共通するのは、物事に対し、自発的に、主体性をもって動いている点である。その大切さに改めて気づかされた。

「オンライン授業」環境はどう整備されたのか

水谷遥香
（法4）

新型コロナウイルスの感染拡大を受け、中央大学は2020年3月から、多様なメディアを利用して行う授業（以下「オンライン授業」）の実施に向けて準備を始めた。オンライン授業の開始から間もなく1年が経とうとしているが、学生の私たちが受講までの過程を知る機会は少ない。中央大学の実務担当者らを取材し、オンライン授業をめぐる環境がどのように整備され、実施されているかを探った。

中央大学学事部は、大学全体の授業や行事のスケジュールの決定・変更について、学生への周知を図った。オンライン授業の準備は前期(春学期)の最初の2週間の特別休講期間に始まり、4月後半から5月後半の特別措置期間には各学部でも授業の進め方が検討されるなど、「土台」の整備が着々と進められた。

大学の実務担当者に“土台”づくりを取材

ITセンターはオンライン授業を行うツールを選定し、授業マニュアルを記したサイト「中央大学 オンライン授業・WEB会議ポータルサイト」を作成した。このサイトで、オンライン授業に関する情報が一元的に見ることができる。ITセンターの担当者によると、「オンライン授業で困ったことがあったら、まずはこのサイトで情報を探してみてください」というコンセプトで作られたものだ。

初めての事態に、学生や教員から問い合わせが数多く寄せられた。ITセンターの職員だけでは対応し切れず、大学の新入職員を含めた学事部、人事部の合同チームで対応した。問い合わせの件数は減る傾向にあるが、現在は「教育的効果をより高めるためのオンラインツールの利用方法に関する問い合わせが増えてきている」(ITセンター)という。

初歩的な内容が多かった前期に比べ、グループディスカッションや動画共有の方法など、後期はより高度な内容の問い合わせが増えている。

資料のリアルタイム共有が可能 授業空間の共有は不可

スケジュールや授業環境といった「土台」の整備を受け、実際に授業を担当する各学部の教員が、双方向型、動画配信型、資料配信型、自主学修指示型の4類型から、自身の授業形式を選択する。法学部の高橋徹教授は、ゼミと外部講師を招いて行う授業は双方向型、それ以外はイントロダクション動画とテキストをmanabaにアップし、資料配信型で行っている。回線トラブルで受講できなかった学生が後で視聴できるようになるほか、学修時間を学生自身の都合に合わせられるメリットがある。

高橋教授はほかにも、「参考資料などをリアルタイムで共有できること」をオンライン授業の長所に挙げる。一方で、「空間を共有できないことが短所」と指摘し、「教室という空間を共有し、授業を経験することで感じ取るものもある。他の学生がどんなリアクションで聞いていたかという情報も大事」と説明する。

オンライン授業の長所と短所について、学事部による教員対象のアンケートでは、メリットとして「時間的負担が少ないこと」、デメリットとして「学生の理解度が分からない」などの声が多く寄せられたという。

オンライン授業開始後の備え

授業開始後も、新しく行われたことや整備が進んでいることがある。

ITセンターは後期や2021年度の授業のために整備を続けてきた。前期に教室の無線アクセスポイントを強化したほか、現在はハイブリッド型授業専用の教室を整備している。ハイブリッド型授業は、教室で対面授業を行いながら、一部の学生はオンラインで参加する授業である。各学部の特性に合わせ、今後実施することになったときに備えるという。

オンライン授業は、コロナ禍において不可欠な措置だ。対面授業と組み合わせる方法も検討されており、オンライン形式は授業の一形態として今後も活用されていくだろう。学生が安心して受講できるよう、システムのトラブルを減らすことや、やむを得ず受講できなかった学生への対処が必要だ。

センター側への問い合わせからは、学生や教員がオンラインでも対面形式に近い形での授業を試みていることが分かる。オンラインならではの長所を生かしつつ、短所をなくしていくことが今後の大学の授業に求められるだろう。

(注)現在、中央大学では、「オンライン授業」については「遠隔授業」を、「対面授業」については「面接授業」という表現を使用していますが、記事中では「オンライン授業」「対面授業」という表現を使っています。

FLPジャーナリズムプログラム 松田美佐ゼミ

学期期間中は、「ジャーナリズムとは何か」を学問的に捉えつつ、調査や論理的思考、議論の力を身につけるためにディベートなどをおこない、夏休みには、場所決めや取材企画の一切をゼミ生が決める取材合宿で、日本全国を巡っている。

ここ数年の取材記事は、HAKUMON　Chuoのバックナンバーで読むことができる。合宿が不可能となった2020年度は、コロナ禍の学生をテーマに各自が取材をおこない、記事にまとめた。

Good luck to You !
学生記者卒業記念コラム

「困難はより良い未来に結びつく」と信じたい

最後に大学で授業を受けた日のことを思い出せない。それが何の授業で、どの教室で受けていたか…。まさか、それが最後の対面授業になるとは思ってもみなかった。

昨年10月、約半年ぶりに足を運んだ多摩キャンパスは以前の姿とはまるで違い、がらんとしていた。そんなことはよくわかっていたはずなのに、違和感を抱かずにいられなかった。キャンパスに学生が存在して、互いに関係性を構築しなければ、その空間は成立しないということを物語っているようだった。

文 & 写真 学生記者 **中里真侑**（文4）

人と知識、人と人との出会い キャンパスは“相互作用”の場

コロナ禍によって日常生活がままならなくなり、大学に通学することもできなくなった。待ち望んでいた対面授業の全面再開は、卒業までにかなわなかった。経験のない特殊な日々を過ごす中で、何度も思い出されたのは、ウィズコロナの今では非現実的となってしまった多摩キャンパスでの何げない日々だった。

数百人の学生が集まる大教室での講義、通学時の満員のモノレールや、人であふれかえった昼休みのヒルトップ…。挙げればきりはないが、それまで当たり前だったキャンパスの光景を思い返すと懐かしくてたまらなくなった。

対面かオンラインかというツールは違っても、学生が自ら行動して知を獲得するという学びの本質が変化することはないだろう。しかし大学は、人と知識、そして人と人との出会いを生み出し、学生同士が影響を与え合いながら相互に作用しあう場所である。

自分で機会を作って物事を実践するということに臆病だった私だが、大学に入学して、人間関係の築き方と自分の視野を広げることを意識するようになった。同じ空間を共有して一緒に一つのものに取り組む活動の過程、さまざまな人たちとの出会いは、私にとって大きな刺激と影響を与えてくれた。

貴重な経験を糧に成長
新社会人としてスタート

学生や教員らの思いが交錯する空間と言えるキャンパスに通うことの意義はやはり大きいと思う。コロナ禍を経験した今、多摩キャンパスで過ごした日常こそが、大切な思い出であったということに気づくことができた。図らずも、大学4年生という節目にコロナ禍という急激な社会の変化に直面することになった。卒業を迎えるにあたり、心残りがないと言えば嘘になる。経験できたはずの機会が失われてしまったことに対する悔しさもある。けれど、大学時代の経験はどれもが貴重だった。

コロナ禍の社会になるまでは、世の中に対しての心配もなく、ただ楽しかったと振り返ることができた。以前の日々に戻れるならそうしたいという思いもあるが、それ以上に未来が良くあることを今は何よりも願っている。困難は、未来を向上させることにつながっていると信じたい。大学生活において、惜しみなく支援してくださった方々に心から感謝したい。

終わりがあれば、始まりがあるように、学生として卒業を迎えても、今後は社会人として新たなスタートを切ることになる。4年間の経験を糧に、希望を失わずに成長し続けたいと思う。

学生記者になりませんか？

『HAKUMON　Chuo』は中大生が取材・編集する大学広報誌です。現在、学部在学生を対象に学生記者を募集しています。

- 元新聞記者のプロや先輩の学生記者に、取材方法・原稿の書き方をはじめ添削指導を受けることができます。将来どんなキャリアを目指すにも文章力が重要です！
- 取材を通して、さまざまな人に出会うことができます。出会いの数ほど思い出ができることでしょう。
- 記者活動を通してコミュニケーション能力など「社会人基礎力」を身につけることができます。

【お申し込み・お問い合わせ】
中央大学広報室『HAKUMON Chuo』編集担当：北村豊　Phone：042-674-2048（直通）　E-mail：hc-grp@g.chuo-u.ac.jp